

スケートボードスクールを通じて癇癇症状が改善した事例

- その改善要因の探索 -

健康スポーツマネジメントコース

5024A301 今泉睦

研究指導教員 中村 好男教授

【背景】筆者は、川崎市においてスケートボードスクールを運営している。スクールの対象は、幼稚園児と小学生の男女であり、初心者から中級者までの技術指導を行っている。開校から2年半が経過し、発達障害児や泣く・癇癇を起こす子どもも含まれている。

スクールにおいて、男子児童が、2年間で泣く・癇癇を起こす症状が改善した事例が確認された。この癇癇症状の改善について、スケートボードが「感情の安定」に寄与する可能性を示唆する先行研究で、(Beal, 1995)「成功と失敗を共有し、努力を称賛する文化」が挑戦意欲の維持に寄与すると述べ、(Abebe, 2024)「技術習得が自己肯定感を高め、挑戦する気持ちを育む」と指摘している。

さらに、癇癇の発現と改善に関する一般的な理論として、*幼児期から学齢期にかけて情動調整能力が発達することが報告されている* (別府, 2018)。このことから、筆者はスクール運営の中でどのような要因が癇癇症状の改善に寄与したのかを明らかにすることに関心を持ち、本研究を実施した。

【目的】本研究は、川崎競輪パークスクールにおいて、泣く・癇癇を起こす小学生が、22ヶ月間のスクールで、症状が改善した具体的要因を明らかにすることを目的とする。

【研究方法】本研究は、川崎競輪パークスクールに通う9歳小3男子Aを対象にする。研究期間は、2023年1月から2024年11月までの22カ月間の観察を実施した。手法は、実行した技術面の観察。Aの行動とAに対する仲間の行動の観察。コーチへのインタビュー。スクール中における家族の変化の記録、ならびにアンケート調査を行った。技術習得に関しては、12段階の技術指標を用いて実施した。

【結果】

1. Aの泣く・癇癇について。図1に示すように、泣くは、2ヶ月目～18ヶ月目まで続いた。癇癇は、2ヶ月目～6ヶ月

目まで続いた。

2. 技術面。22ヶ月で56回の来場をした。図2カテゴリー別・練習日数にある、1～4は、入門時の慣れるレッスンである。Aは、合計56回中25回ターン練習を行い、24回プッシュ練習を行なった。52回目には、同時期に入会し、これまで一度も並んだことのないBとのプッシュ&チクタク競争で初めて勝利した。コーチの報告では、12ヶ月目までは、出来ない苦手な技術はすぐに泣いて諦め、練習継続ができなかった。しかし14ヶ月目以降は、苦手なプッシュを練習し、出来なくても諦めない姿勢でレッスンに望んでいたと聞いている。

3-1. Aに対する仲間の行動。6ヶ月目、12ヶ月目にAが泣いたため、Bが「次はできるよ」と鼓舞した。また、18ヶ月目、Aが転倒し、出血し泣いてうずくまったため、仲間がAの周りに集り、傷の見せ合いが始まった。皆で誰が一番痛かったか、誰の傷が一番ひどいのかを比べあいをしているうちに、Aが泣き止みレッスンに戻った。

3-2. Aの行動。以下コーチからの報告である。16ヶ月目、レッスンが終わり片付けをしていると、A自らが手伝いをしてくれた。すると仲間皆に派生し、皆で片付けを出来た。また、その2ヶ月後に下のクラスから後輩が上がって来た。その際に指示した技術を新人ができなかった。Aがやり方を教え、できたら称賛していた。その18ヶ月目以降、後輩サポートを機に、どの仲間の失敗も「大丈夫、頑張れー」とポジティブな応援をしていた。結果スクール内のコミュニケーション量が増加した。

4-1. 家族の応援。Aの癇癇が6ヶ月目まで続いた。母親の応援は、叱咤激励で、9ヶ月目まで続いた。7ヶ月目以降、癇癇は出ず、Aの症状が泣くだけになると、母親の応援は、笑顔応援に変わり現在に至る。15ヶ月目に父親が初来場し、Aは、父親が来場した際に泣く症状は起こさなかつ

た。(※スクールは、親の応援方法に関与はしていない)

4-2. アンケート。父親に、口頭での質問を行なった。Aの感情が安定したのは何故だと思いますか。「やめたくなくなったらいつでもいいぞ」と話し合い、母親は、アンケート並びにパークにおいて口頭での質問を行なった。感情が安定したのは何故だと思いますか。「仲間の応援」と、「スケボーという好きな事に取り組めたこと」との回答であった。スケボーを始めて変わったことは、「癪癪が減った」、「切り替えが早くなり、ポジティブ思考になった」という回答が返ってきた。

【考察】

1. 癪癪症状の改善における一般的理論

一般的に、癪癪は幼児期から学齢期にかけて自然に減少する傾向があり(別府, 2018)、情動調整能力の発達がその主要因とされる。

2. 「失敗を気にせず、挑戦を称賛する文化が挑戦意欲を持続させる効果がある」(Beal, 1995)と述べており、Aは勝つことができなかった仲間と共に練習し、苦手な技を繰り返し挑戦することで最終的に勝ちを取めた。この諦めずに挑戦を継続してきたことが、情動の改善と考えられる。

3. 「スケートボードの力的な特性が、仲間との関わりを通じて感情を安定させる」(Snyder, 2017)と述べ、「仲間との関わりを通じて情動の気づきが生まれ、感情調整が向上した」(岬, 2019)と述べている。Aは応援される側だったが、手伝う・アドバイスをする転機から、仲間を応援する側になり、コミュニケーションの関わりが増加した。仲間とのコミュニケーション増加が、ポジティブな情動を育んだと考えられる。

4. 「家族の心理的支援が情動調整を補助する」(Ryan & Deci, 1985)と述べており、母親の応援スタイルの変化と父親の積極的な関与の継続した家族の応援がAの感情の安定に寄与したと考えられる。

5. 本研究におけるスケートボードスクールでは、先行研究が示す集団凝集性の重要性和一致する。(持田, 2017)が述べたように、集団内で役割を持ち、協力関係を築くことが情動の安定につながるとされている。また(藤村 & 越, 2010)は、仲間との感情の共有が学級集団の安定に寄与することを示しており、本研究でも泣いている仲間を囲み、

支え合う場面が観察された。このことから、スケートボードスクール内での相互作用が、情動安定と個人の成長に大きな影響を与えた可能性が考えられる。さらに(鳥井 & 中須賀, 2023)が指摘するように、集団凝集性の向上は生徒のモチベーションや適応感を高める要因となる。Aが後輩の指導をすることで、周囲にも協力行動が波及し、最終的にはスクール全体のまとまりが強まったことは、本研究の結果と一致する。以上の点から、スケートボードスクールにおける集団の相互作用が、癪癪改善のみならず、個々の適応力や挑戦意欲の向上にも寄与する可能性を示唆している。この成果は、スケートボードのみならず、他のスポーツスクールにおいても、集団の凝集性を高める仕組みが情動の安定と成長に寄与する可能性があることを示唆している。

【結論】癪癪改善の具体的要因は、「諦めずに挑戦を繰り返した」「仲間とのコミュニケーション増加と集団のまとまり」「継続した家族の応援」が結論である。またスケートボードスクールのみならず、他のスポーツ教育現場においても応用可能な知見となると考えられる。



